

三遊亭圓朝の靈魂觀

野 口 圭 也

(種 智 院 大 学)

はじめに

三遊亭圓朝（本名・出淵治郎吉、天保10〔1839〕年～明治33〔1900〕年）は、幕末期から明治にかけて、江戸・東京において一世を風靡した噺家である。演目の中には多くの創作噺があるが、中でも『怪談牡丹灯籠』を初めとする四篇の怪談噺は、特によく知られている。明治になって速記の技術が開発されるや、それを活かして高座を書き残すことが可能となり、圓朝の語りがそのまま今日まで伝えられることとなった。⁽¹⁾圓朝の話芸は明治の文芸運動にも大きな影響を与え、言文一致体成立の一助ともなったとも言われている。⁽²⁾また異父兄が臨済宗の僧侶であり、少年時代には異父兄が住職を務める寺に母親と共に住み、後年には山岡鉄舟の開いた東京・谷中の全生庵において鉄舟の教えを受けていることから、仏教への造詣も深かったと思われる。墓所は全生庵墓地の中にあり、鉄舟の墓所と隣り合っている。⁽³⁾

圓朝の怪談噺においては、死亡した（特に、殺害されたり、恨みを吞んで死んだ）人間の「靈魂」が「幽霊」として出現し、自らの生前の心残りの事項を解決しようとする。このような物語が多くの人々の支持を得て、今日でもなお演じられている背景には、圓朝の物語に登場する幽霊の有り様が、近代から現代に至るまでの多くの人々の靈魂觀と合致している、もし

くは、近代日本人の幽霊観の形成に影響を及ぼしていることがあるのではないかと想像される。一方、明治の「文明開化」の時代にあって、従来のままの幽霊観を踏襲するのではなく、殺人犯人には、被害者が自分を怨んでいるのではないか、という意識があるので「胸に幽霊をこしらえたら、何を見ても絶えず怪しい姿に見え」る、という「幽霊神経説」を提唱して、「開化先生方」との調停を計っている⁽⁴⁾。

本稿は、圓朝の怪談噺に見られる幽霊の特色を分析し、また上記のような圓朝の幽霊観を取り上げ、それを手がかりとして明治以降現代までに至る、日本における霊魂観の一端を理解することを試みたものである。

もとより、霊魂と幽霊との関係もしくは同一性については厳密な検証が必要であるし、また資料として伝典や古典的な著作ではなく、明治期の大衆芸能である一噺家の怪談を用いることが適切であるか、との批判もあろう。しかしながら本稿においては、幽霊を「広く民衆に受容された霊魂の一形態」としてとらえ、「霊魂の一種としての幽霊」を題材として、同時代の多くの人々の支持を受け、近代以降の日本における幽霊観、ひいては民衆的霊魂観を規定する要因の一つとなったと思われる圓朝の怪談を資料として用いた次第である。

数ある幽霊譚の中で、本稿において特に圓朝作の怪談のみを取り上げたのは、以下の理由による。

- ①圓朝の怪談が、明治以降今日に至るまで多くの人々に知られ、親しまれていること。
- ②多くの人々に親しまれてきたことの要因としては、圓朝の怪談が、近世以降近代から現代に至るまでの日本人が抱いている幽霊観もしくは霊魂観と合致している部分が多い、もしくは、その幽霊観・霊魂観を形成する重要な要素となっている、と考えられること。

③近代合理主義ないし科学的思考が流入した明治時代にあって、近代思想と幽霊とを何とか調停しようと苦心していること。

④実際に圓朝が演じたものが速記によって残されており、資料が豊富であること。

さらに加えて、筆者が住職を務める自坊が舞台となっている話（『怪談乳房榎』）があること、による。

なお、日本仏教会学会学術大会での口頭発表の折りに、日本古代以来の怨霊思想との結びつきはどうか、等々いくつかの貴重なご指摘を頂いたが、本稿では遺憾ながら、紙数の関係で歴史的に遡っての考察などを加えることができなかった。学術大会の折りの諸先生方のご指摘・ご教示に、厚く御礼申し上げる次第である。

1. 三遊亭圓朝の怪談噺

圓朝の怪談では、実際には幽霊が登場する場面はいずれも全体のごく一部であり、主題はすべて仇討ちである。また登場人物が複雑に入り組んでいるが、普通には考えられないような偶然の連鎖によって結びついている。物語中ではこれらの関係を「因果」「因縁」等と呼んでいる⁽⁵⁾。これは仏教語の通俗的解釈というべきであるが、当時の人々にとって、「因果」や「因縁」が、現在のできごとの背後にあると認識されていたことを示すものでもあろう。また、いつ頃の物語なのかという年代設定がなされていること、実地調査も含めて地理が綿密に描き出されていることが⁽⁶⁾、これらの物語の特色である。このことによって物語が具体性・実証性を持つことができ、それによって多くの人々の支持を獲得し得たと言える。ここではまず、圓朝の怪談噺それぞれの内容を簡単に紹介しておきたい。

(1) 『怪談牡丹燈籠』：『怪談牡丹燈籠 怪談乳房榎』（ちくま文庫、1998. 以下、『牡丹燈籠』と略）

文久1〔1861〕年、圓朝23歳の時の作であり、圓朝のすべての噺の中でも、最も有名なものである。明治17〔1884〕年に、若林珅蔵の筆記によって東京稗史出版社より刊行された。元々の題材は中国・明の怪談集である『剪燈新話』中の『牡丹燈記』だが、江戸時代初期の怪談ブームの中で、寛文6〔1666〕年出版の、浅井了意編集の怪談集『伽婢子』に『牡丹燈籠』として収録された。それに江戸時代の実話を加味して、圓朝が創作した物語である。⁽⁷⁾

寛保3〔1743〕年に端を発し、それから二十年後の宝暦12〔1762〕年までの設定。旗本飯島平左衛門の娘・お露は浪人萩原新三郎に思いを寄せるが、恋いこがれて実らぬままに病死する。しかし侍女のお米と共に幽霊となって新三郎の家に現れ、思いを遂げる。幽霊は毎晩通うが、新三郎は、隣人の占い師・白翁堂勇斎にこのままでは命を落とすと告げられ、新幡随院の良石和尚より本尊海音如来像と『雨宝陀羅尼經』の文言と守護のお札を授かり、それによって二人の来訪を防ぐ。ところが幽霊は新三郎の隣人の悪人・伴蔵にお札はがしを依頼し、伴蔵は金百両で引き受ける。幽霊は飯島家から百両を持ち出して伴蔵に渡す。伴蔵は守り像を盗んでお札をはがし、新三郎は落命することになる。

伴蔵は妻のお峯とともに中仙道栗橋に逃れて、幽霊から受け取った金を元手に店を始める。そのうち愛人（後述のお国である）ができてお峯が邪魔になり、殺害する。殺されたお峯の靈魂は伴蔵の店の女中・番頭・小僧に次々に憑依し、自分は伴蔵に殺されたことを周囲に告げる。伴蔵は悪人仲間と江戸に出てくるが、捕縛されて処刑される。

この有名な怪談噺の中で、幽霊が出現するのは上記のごく一部分にすぎ

ず、全体はお露の父である飯島平左衛門の仇を討とうとする孝助（旧姓黒川、後に相川家に入婿）の物語である。平左衛門は孝助の主人であるが、実は孝助の実の父の仇であり、平左衛門の仇の一人であるお国は孝助の義理の姉であり、孝助の実の母の仇でもある。さらに伴蔵を捕らえたのは孝助である。最後に孝助は、平左衛門、お露、新三郎のために濡れ仏を建立した、という「新幡随院濡れ仏」の縁起としてまとめられている。

(2) 『怪談乳房榎』：『怪談牡丹燈籠 怪談乳房榎』（ちくま文庫、1998. 以下、『乳房榎』と略）

圓朝40歳代の作とされる。松永魁南の筆記によって『東京絵入新聞』に連載後、明治21〔1888〕年に出版された。

宝暦2〔1752〕年、江戸・柳島に名高い絵師・菱川重信がいた。重信にはおきせという美貌の妻と、生まれたばかりの長男・真与太郎がいたが、浪人磯貝浪江はおきせに邪心を起こして重信に取り入って内弟子となり、重信とおきせを懐柔して、信頼を得る。ある時、高田砂利場村南蔵院（現・豊島区高田。筆者の自坊である）の天井に、雄龍・雌龍(10)の絵を描くこととなり、柳島から通うのは遠いので、泊まりがけで出かける。浪江は、この重信の留守中に真与太郎を人質にしておきせに言い寄り、手込めにしてしまう。浪江は重信の殺害を企て、南蔵院に同行していた下男の正介を甘言と強迫によって抱き込み、間もなく絵が完成するという晩に、落合田島橋の蛸見物に重信をおびきだして斬殺する。正介が南蔵院に飛んで帰ると、そこには寺の人々の前にすでに出現していた重信の幽霊が、絵を完成させて落款を押し、正介に声を掛け姿を消す。

その後、浪江はおきせの夫となるが、敵討ちを怖れて、真与太郎を新宿十二社の滝に投げ込んで殺すよう正介に命じる。正介は浪江に脅されて十二社の滝に真与太郎を投げ入れると、重信の幽霊が真与太郎を抱いて滝か

ら出現し、正介に改心を迫り、真与太郎を養育することを命じて姿を消す。正介は真与太郎と共に実家の板橋赤塚に逃れ、松月院の門番となる。

松月院の境内には榎の木があり、その樹液が乳の出や乳房の腫れ物に効果があると言われていた。五年後、おきせは乳房に腫れ物ができて苦しんでおり、その榎の樹液を知人（正介とも知り合い）に取りに行かせて、おきせの乳房に付ける。するとおきせの夢に血まみれの重信があらわれる。乳房の膿を出そうとして浪江が誤って深く傷つけると、そこから怪鳥が飛び出し、おきせは舌を噛んで死ぬ。

浪江は正介と真与太郎が松月院にいることを知人から聞き、殺しに行くが、逆に真与太郎は、後ろから誰かが刀を持ち添えているような助けを借りて、正介と共に浪江を討ち果たす。

この物語も、悪人磯貝浪江に対する仇討ちが基調となっているが、『牡丹燈籠』に比して幽霊の出現がより効果的であり、物語の中での必然性が高いと言える。

この物語で興味深いのは、幽霊の姿が経時的に変化していることである。菱川重信の幽霊が、死亡とほぼ同時の最初に出現した時（龍の絵を完成させる場面）は殺害時点の傷のない姿、約一年後（十二社の滝の場面）には殺害後の傷ついた姿で出現し、五年後には血だらけの姿で夢の中でのみ現れ（浪江おきせの住まい）、あるいは怪鳥の姿（同）、もしくは姿無しで存在を示唆（板橋松月院の場面）している。すなわち時間の経過とともに姿が変遷し、徐々に元の姿から隔たっていくのである。

(3) 『眞景累ヶ淵』：『明治文学全集10 三遊亭圓朝集』（筑摩書房、1965. 以下、『累ヶ淵』と略）

一人の女性の怨みによって、その女性の夫の再婚相手が次々に死亡する果の物語は、元禄3〔1690〕年出版の『死霊解脱物語聞書』に、江戸時代

初期の浄土宗の高僧である祐天上人の靈驗談として収められているが、圓朝はそれに題材を取りながら、異なる物語として創作している。すでに21歳のころから『累ヶ淵後日怪談』として演じていたが、明治2〔1869〕年、31歳の時に素噺として演じられた。速記は小相栄太郎で、出版は明治21〔1888〕年とされる。

安永2〔1773〕年、盲人の針医・皆川宅悦は借金返済の催促に行って、旗本深見新左衛門に殺害される。宅悦には志賀（豊志賀）と園という二人の娘がいた。園は新左衛門の長男新五郎によって不慮の死を遂げる。新五郎は後に逮捕、処刑される。十九年後、豊志賀は富本の師匠となって、新左衛門の二男新吉と、互いに出自を知らずに内縁関係になっている。豊志賀は病で顔に腫物ができて以降嫉妬深くなり、弟子のお久に新吉が心変わりしたのではないかと度々難じ、怪異を起して病死する。新吉は下総羽生村（元々の累伝説の故地である）にお久と駆け落ちするが、豊志賀の怨念につきまとわれ、お久を鎌で殺害する。その後、羽生村の資産家の娘であるお累るいと結婚するが、実は異母妹であるお賤と深い仲になり、お累との間の自分の子を殺害し、お累はお久と同じ鎌で自殺する。新吉はさらに悪事を重ねるが、最後はお賤を同一の鎌で殺害して自害する。

話をしているお久の顔が突然豊志賀の顔に変じたり、あるいは豊志賀の生き霊が現れたり、同じ鎌が次々に凶器となり、新吉に関わる女性の命を奪う（これは再婚相手が次々に死ぬ累伝説を踏襲している）などの怪談的エピソードが多数現れるが、後半部分では仇討ち物語が話の軸となっている。ただし、仇討ち物語が結びつかねばならない必然性は希薄であるように思われる。元々の累ヶ淵伝説は、話中話として語られている。

(4) 『鏡ヶ池操松影（江島屋騒動）』：『三遊亭圓朝全集』第1巻（角川書店、1975。以下、『鏡ヶ池』と略）

明治2〔1869〕年頃の作とされる。初版は明治18〔1885〕年で、筆記は若林珣蔵による。

天保5〔1834〕年に大団円を迎える話。医師の息子倉岡元仲は、悪党仲間の伴野林蔵と共に、浪人野口安兵衛を殺害して、安兵衛の所持する上物の脇差しを奪おうとするが、安兵衛の霊魂が火の玉となって脇差しを運び去る。短刀は後に安兵衛の子である安二郎の手に戻る。安次郎は元仲に奉公先の大金を奪われたことがきっかけとなって古着商江島屋に奉公し、真面目に働き治平と名を改めて、江島屋の夫婦養子となる。しかし、江島屋の売った着物が原因で婚礼の場で恥をかいて自殺したお里（実は倉岡元仲の異母妹）と、その母親おさよの怨念によって、江島屋に災いが起こる。

治平は、江島屋の奉公人で主人の手がついた、お仲（実はお里の異父姉だが、そのことは知らない）の讒言により、妻と離縁した上に江島屋を出される。江島屋は火事によって財産を失い、盲目となった主人治右衛門はお仲の田舎へ行く途中、お里の七回忌の命日に、お里が死んだのと同じ川で、お里と同じ死に方をする。お仲は改心し、出家して薬師堂を建立する。治平は吉原の花魁となった妻の力を借りて、悪の限りを尽くした元仲と林蔵の仇二名を討ち果たし、江島屋を再興する。

やはり、幽霊談と仇討ちとが結びつけられており、複雑な人間関係が織りなされているが、人間関係の設定には、かなり無理があるように感ぜられる。

2. 圓朝の各怪談における幽霊

それぞれの怪談において、誰の幽霊が、誰に対して、どのような形で出現し、いかなる活動を行ったのか、ということを表の形にまとめてみよう。

表Ⅰ 各怪談における幽霊・出現対象・目撃者

番号	物語	ページ	幽 霊	出現対象	目 撃 者
1-i	牡丹灯籠	42-46	飯島お露	萩原新三郎	
1-ii	牡丹灯籠	59-62	飯島お露・侍女お米	萩原新三郎	萩原家隣人・伴蔵
1-iii	牡丹灯籠	83-84	飯島お露・侍女お米	萩原新三郎	
1-iv	牡丹灯籠	102-110	飯島お露・侍女お米	伴蔵	
1-v	牡丹灯籠	111-112	お米と思われる	飯島家	飯島家妾お国
1-vi	牡丹灯籠	130-133	飯島お露・侍女お米	萩原新三郎	伴蔵
1-vii	牡丹灯籠	174-178	飯島お露・侍女お米	萩原新三郎	伴蔵・占い師勇斎
1-viii	牡丹灯籠	193-201	伴蔵の妻お峯	伴蔵	番頭・医師志丈
2-i	乳房榎	343-346	絵師菱川重信	下男正介	寺の者たち
2-ii	乳房榎	372-376	菱川重信	正介	
2-iii	乳房榎	404-405	菱川重信	元妻おきせ	
2-iv	乳房榎	406-409	菱川重信	おきせ・浪江	(下女たち)
2-v	乳房榎	412-412	菱川重信	磯貝浪江	(正介)
3-i	果ヶ淵	219-221	盲人皆川宗悦	深見新左衛門	(門番勘蔵・妻)
3-ii	果ヶ淵	221	皆川宗悦	深見新左衛門	
3-iii	果ヶ淵	235-236	宗悦の長女豊志賀	〔深見〕新吉	(お久)
3-iv	果ヶ淵	236-237	豊志賀	新吉	勘蔵・駕籠屋
3-v	果ヶ淵	240-241	豊志賀	新吉	
3-vi	果ヶ淵	250	豊志賀	お果	
3-vii	果ヶ淵	254	豊志賀	新吉・果夫婦	
3-viii	果ヶ淵	257-260	新吉兄深見新五郎	新吉	
3-ix	果ヶ淵	260	深見新五郎	新吉・お果	
3-x	果ヶ淵	269-270	お果	新吉	お賤・作蔵
3-xi	鏡ヶ池	322-323	お果	新吉・お賤	
4-i	鏡ヶ池	231-233	野口安兵衛	倅安次郎	江島屋番頭金兵衛
4-ii	鏡ヶ池	238	野口安兵衛	倉岡元仲	伴野林蔵
4-iii	鏡ヶ池	264	お里	(治右衛門)	金兵衛
4-iv	鏡ヶ池	265	お里の母おさよ	(治右衛門)	金兵衛
4-v	鏡ヶ池	308-309	おさよ	(治右衛門)	治右衛門妾お仲

表Ⅱ 各怪談における幽霊の姿形ならびに出現目的・活動

番号	姿 形	出現目的・活動
1-i	新三郎の夢の中に出現	夢の中で渡された香箱の蓋が実際に落ちている
1-ii	露：文金高髻・秋草色 染振袖・緋縮緬長襦袢 団扇・駒下駄の音 米：大丸髻で牡丹燈籠 を持つ	新三郎に恋いこがれて逢い引きをする 7日間、夜に来て夜明け前に帰る 新三郎には生前のままの姿で見えるが、伴蔵にはどちら も痩せて骨と皮ばかりで、腰から上だけの「絵に描いた 幽霊の通り」に見える
1-iii	上記と同じ姿	お札のために家に入ることができない
1-iv	上記の姿と思われる	お札をはがし本尊海音如来像を盗むことを依頼
1-v	襖や錠を開ける音	伴蔵が引き受ける条件とした百両を盗む
1-vi	明記されていないが、 上記の姿と思われる	伴蔵は如来像を盗み、幽霊から百両を受け取ってお札を はがす。両名は新三郎の家の中に入る
1-vii	新三郎の寝床の中で骸 骨の手が新三郎の首に かじりついて、足の骨 などが床の内に散乱し ている	新三郎は虚空をつかみ、歯をくいしばって苦しんで死ん だ様子。伴蔵は後に、自分が新三郎の肋骨を蹴り殺し、 新幡随院の墓地の新塚を掘り起こして、髑髏を寝床に並 べて怪しい死に様に見せかけた、と述べている(p.201- 202)。
1-viii	女中・番頭・小僧に憑 依	自分が伴蔵に殺されたことを周囲の人に大声で語る
2-i	殺害直前の姿	描きかけの龍の絵を完成させる
2-ii	殺害時のままの姿	滝に投げ込まれた我が子を救出し、正介に説教
2-iii	血だらけの姿で夢の中	おきせに祟り、怨み言を言って苦しませる
2-iv	白緑色の異形の鳥	おきせの乳房を内側から突いて苦しませる
2-v	姿は見えない	息子の仇討ちを後ろから刀を持ち添えて手助け
3-i	流しの按摩	新左衛門に怨みを言い、妻を誤って殺させる
3-ii	眼のところが凹んだ、 痩せかかれた坊主・陰火	新左衛門の隣人を病気にし、新左衛門死亡の遠因を作る。 深見家は改易となる。
3-iii	お久の顔が豊志賀の顔 になる	新吉の本心を確かめるため

3-iv	病氣療養中のままの姿 (寝間着・褌袍)	新吉伯父勘藏の前で新吉と別れ話をするため、と見せかけて、実際には新吉を怨んで、女房を七人まで取り殺す*1と書き置きして自宅で絶命
3-v	お久の顔が豊志賀の顔になる	新吉に怨み言を言って新吉を恐怖させ、誤って側にあった鎌*2でお久を殺させる
3-vi	二尺余りの蛇	お累を驚かせ、顔に火傷を負わせる
3-vii	蛇（鎌に纏い付いて二つに切れて消える）	二人の新婚の晩に出現して、鎌の因縁を暗示し、二人を驚かせる。
3-viii	生前の姿で夢の中	新吉に仇をとるか、盗賊になるか、と迫る
3-ix	子供が新五郎に生写し	自分の仇となる、お累の兄・三蔵への怨み
3-x	子供を抱きずぶ濡れ姿	子供を殺した新吉に怨み言を言う
3-xi	出現はなし	ケガをしたお賤の顔がお累のようになる
4-i	安次郎や、金兵衛の夢の中に出現	殺害された晩に安次郎を案じて奉公先に現れて、許嫁のことや奉公の心得を説く。
4-ii	一団の陰火	家宝の脇差しを殺害者から守るため、脇差しの袋にまといついで飛び上がる
4-iii	島田髷・裾のちぎれた振り袖	自殺の原因となったいかものの振り袖を売った江島屋の主人に祟るため満一周忌に出現
4-iv	やせ枯れ果てた婆	江島屋を呪って治右衛門の眼を悪くする。既にその前に、江島屋の妻と小僧が頓死している
4-v	やせた乞食のような婆	治右衛門を娘の死んだ川の中へ落とす

*1. 元々の累伝説を踏まえたもの。正保4〔1647〕年、下総羽生村の累という女性が入り婿である夫に殺害された。夫はそしらぬ顔で累を葬り、後添いをもらうが、累の怨念によって後添いが六人まで死ぬ（服部幸雄前掲論文p.232）。

*2. お累の兄で、羽生村の裕福な質屋である三蔵の印が焼き印された鎌。新吉と駆け落ちしてきたお久がたまたま土手にあった三蔵の家の鎌で足にケガをし、さらに誤って新吉がその鎌でお久を殺す。同じ鎌が今度は蛇の出現の場面に現れ、さらにお累がその鎌で自殺する。最後に新吉は自らの罪を自覚して、その鎌で実は異母妹であるお賤の喉を刺し、自らも腹を切って死ぬ。さらにお賤の母であり、新吉の父の妾であったお熊も、同じ鎌で喉を掻き切って自害する。

ここでは人間の形をした幽霊ばかりではなく、霊魂が何らかの形で出現したものである事例を取り上げている。

なお、表Ⅰにおいて、太字で記した人名は、その幽霊の殺害犯人、または死亡の原因となった者を、また（ ）内に記した人名は、幽霊出現の現場にいたにも拘わらず、幽霊を目撃しなかった者を、それぞれ表している。

3. 圓朝作品中の幽霊の特色と、「幽霊神経説」

(1) 圓朝の幽霊の特色

前掲の表より、圓朝の怪談に登場する幽霊には、概ね次のような特色があることが看取される。

①怨恨や恋愛など、強い感情を持って死亡した人間は、死後幽霊となって、殺害犯や遺族などの関係者の前に出現し、心残りの事項の遂行 [1-i ~ ii, 1-iv ~ vii, 2-i, 4-i, 4-ii], 救出 [2-ii], 怨みを晴らす [その他のほぼすべての事例] などの活動を行う。

②特に、殺害された人物が、殺害犯人 [1-viii, 2-iv, 2-v, 3-i, 3-ii, 4-ii] や、その殺害または死亡に深く関与している人物 [1-i ~ iii, 1-vi, 1-vii, 2-i ~ iv, 3-iii ~ vii, 3-x, 3-xi, 4-iii ~ v] の前に出現することが多い。

③殺害でなくても、自殺 [3-x, 4-iii] や病死 [1-i ~ vi, 3-iv]・衰弱死 [4-iv, 4-v] の場合、あるいはまだ生存中に出現する場合 [3-iii] もある。

④主たる出現対象となっている人物以外にも目撃者がいることが多いが、幽霊が出現しているのに当事者以外には見えないこともしばしばある [2-iv, 3-i, 3-iii, 4-iii, 4-iv]。目撃者と当事者で見え方が相違している場合もある [1-ii]。また当事者の夢の中に出現する例も多い [1-i, 2-iii,

3-viii～ix, 4-i]。

⑤出現する姿は本人の死亡時点の姿が多いが、死亡少し前の姿 [1-i, 2-i, 4-i]，死亡後の季節の姿 [1-ii～vii] の場合もある。

⑥他人の姿をとって現れたり [3-i]，他人がその人物に見えたり [3-iii, 3-v]，他人に憑依する [1-viii] こともある。

⑦人間の姿を取らない場合 [2-iv, 3-vi, 3-vii, 4-ii]，あるいは姿形が存在しない場合 [2-v] もある。

⑧姿を見せるのみでなく、物体の移動や出現等の物理的作業を行うことも多い [1-i, 1-v, 1-vi, 2-i, 2-ii, 2-v, 4-ii]。

⑨行動を支配して殺害させたり [2-iv, 3-i, 3-v]，怨嗟の対象に身体的影響を及ぼすこと [2-iii, 2-iv, 3-vi, 3-ix, 3-xi, 4-iii] や、死亡の原因を作ること [3-ii, 4-v] もある。

⑩出現時期は、死亡直前 [3-iii]，死亡とほぼ同時 [3-iv]，死亡直後 [1-iii, 2-i, 4-i, 4-ii]，三七日の次の日 [3-v]，暫く後（盆・七七日忌頃？）[1-ii]，一周忌の日 [4-iii, 4-iv]，約一年後 [2-ii, 3-i, 3-ii]，五年後 [2-iii～v]，七回忌の日 [4-v]，死亡後約十年間持続 [3-iv～xi] のようなケースがある。

これをまとめると、圓朝の怪談の幽霊は以下のような特徴を持つことになる。

ア。幽霊は、生前の強い情動によって、死後に関係者のところに出現する（①②③④）。

イ。基本的には本人の死亡時の姿を取るが、それ以外にもいくつかの形態を取り得る（⑤⑥⑦）。

ウ。夢などの単なる心的現象に止まらず、物理的作用を及ぼすことも多い（⑧⑨）。

エ．死後、かなり長期に亘って怨恨もしくは怨念が持続し、最終的に目的を達成するケースがしばしば見られる（⑨）。

このような圓朝の幽霊の特徴は、今日語られている他の多くの幽霊物語と共通するものと言えるだろう。明治の圓朝の創作した「幽霊の基本的なスタイル」が、現代に至るまで踏襲されていることになる。そしてそれはまた、人間の霊魂が死後、いかなる形態を執ってどのような活動を行うのか、という霊魂観の一つの表れでもある。圓朝の怪談物語においては、強い情動を持って死んだ場合には、霊魂は上記のアーエのような形で死後も存続し続け、生者に対して大きな影響を及ぼすものとなるのである。

（２）「幽霊神経説」

圓朝は『累ヶ淵』の冒頭で「幽霊神経説」と言うべき、次のような幽霊解釈を披露している。怪談の題名の「眞景」も、「神経」のもじりである。

幽霊と云ふものは無い、全く神経病だと云ふことになりましたから、怪談は開化先生方はお嫌いなさる事でございます。（中略）只今では幽霊がないものと諦めましたから、とんと怖い事はございません。（中略）何でも怖いものは皆神経病におっつけてしまひます（中略）悪い事をせぬ方には幽霊と云ふ物は決してございせんが、人を殺して物を取るといふやうな悪事をする者には、必ず幽霊が有ります。是が即ち神経病と云って、自分の幽霊を背負って居るようなことを致します。例えば彼奴を殺した時に斯ういふ顔付をして睨んだが、若しや己を怨んで居やアしないか、と云ふことが一つ胸にあって胸に幽霊をこしらへたら、何を見ても絶えず怪しい姿に見えます。又その執念の深い人は、生きて居ながら幽霊になることがございます（『累ヶ淵』p. 212）

これは、明治期における文明開化の風潮の中での、幽霊話が荒唐無稽で

ある、という批判に対して、圓朝が幽霊の合理的説明を試みたものである。この他、『牡丹燈籠』において、荻原新三郎の怪死は、実は自分が行った企みであると隣人である悪人伴蔵に語らせている（『牡丹燈籠』p. 201-202）のもまた、怪異を合理的に説明しようとの意図によるものである⁽¹³⁾。ただしこの説明によって、怪異談としての魅力は大きく損なわれてしまうように思われる。

(3) 圓朝の幽霊と仏教思想

圓朝は、僧侶や仏教研究者ではないものの、前述のように仏教を学ぶことのできる環境にいたこともあり、当時の一般の人々よりも仏教への造詣は深かったのではないかと想像される。噺の中では、かなり俗流の仏教解釈を語ってはいるが、これは高座で演じる噺という性格上、聞き手を考慮して、意図的に通俗的な説を取り入れていたと考えられる。圓朝の怪談における幽霊を仏教思想から考察すると、以下のようなことが言えるだろう。あるいは、唯識思想の影響がある可能性もあるように思われる。⁽¹⁴⁾

- A. 上記（1）アで述べたように、幽霊は生前の強い情動によって、死後に関係者のところに出現する。これは、意業の強さを物語るものである。
- B. 殺害者など当事者の「神経」によって幽霊が見える場合もある、とするのは、自らの行為の結果、膿の川が見えたり地獄の獄卒が見える、とする『唯識二十論』の記述を想起させる⁽¹⁵⁾。
- C. 殺害者にとって最も印象が強いのは、殺害時の相手の姿であるから、幽霊が死亡時の姿を執る事が多い、というのも、「幽霊神経説」に随えば理解可能となる。
- D. 幽霊によって人が死ぬのも、一つには、自らの行為の結果として幽霊を見て、それに恐怖して誤って殺害に及ぶ場合がある。これは

「幽霊神経説」で説明可能である。

E. 『唯識二十論』には、「ある人の特殊な表象の影響力によって、他の人々に命根を害するようななんらかの異変が生じ」て、死がもたらされることがあると説かれている⁽¹⁶⁾。これもまた、幽霊によって人が死ぬ根拠となり得るであろう。

F. 中有説から見た場合には、幽霊が死亡時の姿を保持したり、四十九日を超えて数年後まで存在し続けるのは、不合理である。しかし、「幽霊神経説」に随えば、幽霊という表象を見せているのは自らの心相続であるから、問題はないことになる。

しかし、「幽霊神経説」に立ったとしても、なお不合理と思われる点もある。幽霊が純粋に心的な現象であり、神経のなせるわざであるのならば、いかにして筆を執ったり落款を押したり [2-i]、手文庫の錠前をねじ切って金を盗んだり [1-v]、という物理的作用を果たすことができるのか。『唯識二十論』では、夢の中での性交を比喻に挙げて、実在しない対象が効果的作用を果たし得ることが説かれているが、物体の移動を伴う事例には該当しないであろう。『鏡ヶ池』で陰火がまといついて飛び上がった脇差し [4-ii] は、実際には移動しておらず、殺害現場において後に発見されている。これは「幽霊神経説」に基づく合理的説明のためであろう。『牡丹燈籠』では後に伴蔵が、「幽霊にたのまれた」というのも「わっちのこしらえごと」とであると述べている (p. 201)。だとすると百両を飯島家から盗んだのも伴蔵であることになる。しかし実際にどのようにして盗んだのかは不明であり、これも不合理である。

おわりに

本稿では三遊亭圓朝の怪談に登場する幽霊を題材として、近代日本の一般の人々が抱いていた霊魂観の一例を探ってきた。圓朝と時代が重なり、「妖怪学」を展開した学者に井上円了がいる。井上は「霊魂不滅説」を唱え、しかも幽霊は否定していた。近代日本の霊魂観を理解する上で、両者の比較は極めて興味深い課題であるが、この度は紙数の関係で論じることができなかった。また圓朝の怪談以外の作品においても散見される霊魂や仏教⁽¹⁹⁾についての見解も、今回は取り上げることができなかった。これらの点については、機会を改めて取り上げることとしたい。

注

- (1) 興津要「明治開化期文学集解説」、興津要・前田愛注釈『日本近代文学大系第1巻 明治開化期文学集』、角川書店、1970、pp. 56-57。
- (2) 興津要前掲論文 pp. 49-50、また興津要「解題」、『明治文学全集10 三遊亭圓朝集』、筑摩書房、1965、pp. 407-409。それによると、二葉亭四迷や山田美妙といった、明治文学史における言文一致体の創始者が、圓朝の速記本を参照して新たな文体を創作していた。
- (3) 圓朝の伝記については、以下の諸資料を参照した。
 - ◎朗月散史編「三遊亭圓朝子の傳」、『明治文学全集10 三遊亭圓朝集』、pp. 379-398。
 - ◎岡鬼太郎「圓朝雜觀」、同書、pp. 398-403。
 - ◎久保田万太郎「解説」、三遊亭圓朝『真景累ヶ淵』、岩波書店、1956、pp. 301-312。
 - ◎安藤鶴夫「解説 円朝のこと」、三遊亭圓朝『怪談牡丹燈籠 怪談乳房榎』、ちくま文庫、1998（初版 筑摩書房、1967）、pp. 415-435。
 - ◎森まゆみ「解説 二人の円朝」、坪内祐三・森まゆみ編『明治の文学第3巻 三遊亭円朝』、筑摩書房、2001、pp. 406-417。
- (4) 「真景累ヶ淵」『明治文学全集10 三遊亭圓朝集』、p. 212。
- (5) 『累ヶ淵』において「因縁」について語られている。「どういふ譯か因縁と云ふと大概のことは諦めがつきます」（『累ヶ淵』p. 225）。また新吉・お

賤・お熊三名の墓を「因果塚」と称している（『累ヶ淵』p. 331）。また『鏡ヶ池』では、江島屋治右衛門がお里と同じ様な死に方をしたことを「これがいわゆる因果応報」としている（『鏡ヶ池』p. 309）。内藤正敏「三遊亭圓朝の怪談に隠された“王権と幽霊”の物語—『怪談乳房榎』と『怪談牡丹燈籠』—」（小松和彦編『日本妖怪学大全』，小学館，2003）では、複雑に入り組んでいる「牡丹燈籠」における人間関係について、「因果応報のからみあい」として詳細に分析している（pp. 374-380）。

- (6) 怪談に限らず、圓朝はよく知っている土地や実際に訪れた土地を作品に取り上げ、あるいは創作にあたって実地調査を行っている。興津要「解説」p. 411，延広真治「牡丹燈籠」辻惟雄監修『全生庵蔵 三遊亭圓朝コレクション幽霊名画集』，ベリかん社，1995，p. 137，p. 139。
- (7) 「牡丹燈籠」成立のソースについては、延広真治前掲論文，また，奥野信太郎「解説」，三遊亭圓朝『怪談牡丹燈籠』，岩波書店，1955，repr. 2002，に特に詳しい。
- (8) この物語の設定年代の当時，新幡随院を開いた了碩和尚（宝暦7 [1757] 年寂）という高僧が実在していた。延広真治前掲論文 pp. 138-139。
- (9) 作中に『雨宝陀羅尼經』（大正大藏經 No. 1163）の本文の一部が音写で引かれており，嘶の中でそれを実際に唱えるようになっている。この音写文は、『大正大藏經』vol. 20，668a に相当するが，『大正大藏經』のテキストと極めてよく合致しており，葉叉らの害を避ける，という功德も経典本文と一致する。『明治開化期文學集』所収の『牡丹燈籠』には，この陀羅尼の還梵まで含む，詳細な注記がほどこされている（pp. 300-301，pp. 448-449）。一般的とはいえないが，圓朝はどこからこの経典の知識を得たのだろうか。
- (10) 実証的な圓朝のことであるから，彼の時代には，実際に南蔵院の本堂に雄龍・雌龍の絵があり，それを見たのではないかと思われる。ただし内藤正敏前掲論文では、『江戸名所図絵』など江戸時代の記録には，南蔵院の雄龍・雌龍の天井画について記されていないことから，龍の絵のことは圓朝の創作としている（p. 358）。この時の本堂は，昭和20 [1945] 年の空襲によって焼失した。往時を知る先代住職より，天井画は薄くなってよく見えなかった，とかつて聞いたことがある。もう一つの舞台である板橋の松月院は，圓朝と深い関わりのある山岡鉄舟ゆかりの寺である（内藤前掲論文 p. 362）。なお、『怪談牡丹燈籠』ならびに『怪談乳房榎』の舞台となったそれぞれの場所が持つ空間論的な意味については，内藤正敏前掲論文において詳しく論じられている（pp. 355-365，380-388）。

- (11) 南蔵院の僧侶として「所化の随連」という名が出てくる (p. 345, p. 346) が、南蔵院の過去帳には見いだすことができなかった。住職も話中に登場するが、名前は挙げられていない。
- (12) 「果伝説」については、服部幸雄「果曼陀羅」(小松和彦編『怪異の民俗学 ⑥幽霊』, 河出書房新社, 2001所収, 初出は『国文学』19-9, 1974) において詳しく論じられている。また川村湊「累とお岩」(小松編『同書』所収, 初出は『朝日ジャーナル』1987年9月18日号) では、累とお岩の対比を中心に論じている
- (13) 延広真治前掲論文において、このことが取り上げられている (p. 141-142)。そこでは「この矛盾は、筋の一貫性よりも、その場面毎の興趣を尊ぶことによる、と解している。
- (14) 日本仏教学会学術大会の発表の折りに、山岡鉄舟が『成唯識論』の巻頭に揮毫しているものがある旨のご教示を頂戴した。鉄舟が唯識思想を学んでいたのだとすると、圓朝も鉄舟より、詳しくはなくとも、何らかの形で唯識思想の教えを受けていた可能性があるだろう。
- (15) 「餓鬼たちは(前世で行った悪い) 共通の行為(業) が成熟した結果として(餓鬼という) 状態に陥っているため、そのすべてのものが、(膿がありもしない河を) 膿に満ちた河だと見てしまう」(梶山雄一訳『唯識二十論』, 長尾雅人・梶山雄一監修『大乘仏典15 世親論集』, 中央公論社, 1976, p. 9)。ed. S. Lévi, Paris, 1925, p. 4, 11. 3-4。
「地獄の守衛などは、事実としては存在しないのであるが、彼ら(罪人たちが前世で行った) 共通の(行為と) 自分自身の行為(と) が成熟(して、悪い報いもたらされること) によって、これらの守衛たちに迫害されることが認められる。」(『同書』, p. 10, 一部改変)。Lévi, *op. cit.*, p. 4, 11. 16-17.
- (16) 「ある人の特殊な表象の影響力によって、他の人々に命根を害するようななんらかの異変が生じ、そのために、死、すなわちある衆生集団における心の流れが断絶するという現象が起こるのであると知らねばならない」(『同書』, p. 28, 一部改変)。Lévi, *op. cit.*, p. 10, 11. 8-9.
- (17) 中有は、次に生まれ変わる行き先(趣) において生じるであろう「本有(結生の後、死の直前までの生存)」の形態を取っている。また存続期間は最大で49日間とされる。cf. *Abhidharmakośaśāstra*, ed. P. Pradhan, Patna, 1975, p. 123, 11. 22-23. p. 126, 1. 10.
- (18) 「夢のなかで、実際に性交することはないのに精子の漏出という形の夢のあやまちがありうるように」(『大乘仏典15 世親論集』, p. 10)。Lévi, *op. cit.*, p. 4, 11. 8-9.

(19) 例えば有名な新作落語である『明治の地獄』では、マクラにおいて次のように語っている。

「地獄からどうせ郵便の届いた試しもなし、極楽の写真を見た事もないから、是は有るか無いか頼と分らん事で、人が死んで行く時は何んなものか、此の肉体と^{たましひ}靈魂と離れる時は其の^{たましひ}靈魂は何処へ去きますか、どうも是は分かん」(『明治の文学第3巻 三遊亭円朝』, p. 315)